忍あ[illegible]

和書門
類
一七六八五號
一七八函
五架
五三冊

内閣文庫
和書類
一七六八五號 16
五三冊
二〇二函
二二架

内閣文庫
番號 和 17685
冊數 53（16）
函號 202 350

書籍館印

日本政府圖書

淺草文庫

和學講談所

繪合

廿九歳

前斎宮御入内之事

絵合巻にハ[illegible]見えたれとも
[illegible]御息所一周忌はてゝの内に入内なるの
事なれハ一とせの源氏廿九歳の事なり
年より[illegible]へし

卅歳　内大臣

前斎宮御入内之事（梅壺女御也後号秋好中宮）

朱雀院贈刺櫛筥薫衣香等給事

主上好繪給事

源氏君奉繪於帝事

三月廿餘日梅壺女御与弘徽殿女御繪（合ノ）事

国立公文書館
National Archives of Japan

右大貳典侍　中將命婦　兵衞命婦
左方房平典侍　侍從内侍　少將命婦
朱雀院奉繪於梅壷繪事
又猶御前有繪合事（淸涼殿以西庇爲其所　摸天德哥合之例也）
源氏御繪須磨巻出來仍左方勝事
源氏与帥宮御物語事
物合之次有御遊事
山里立御堂事（嵯峨御堂也）

繪合

也　以此詞爲巻名
秘云　繪とてなにゝ詞をかきたる左右の
御繪ありける文竹取の翁と伊勢物の
こうしけ御合ありて年かへくして有
也　後於是集詞り　西の内殿にて（秘須年繪合　雀皇女）
の事[illegible]扇合[illegible]皆に繪合
ともなり
也　此御繪合二度あり内にて[illegible]
天德の合[illegible]冷泉院へと
ゆかりの[illegible]
此繪合　御本[illegible]の二月の事
也　御本[illegible]の事に繪合まへ二月の
此の事[illegible]

しく
平ゝ女御ハ帥内大臣伊周公の御むすめにてましける
ならのすへし

前斎院の御まいりける事
号村上ノ冷泉院の女御まいりましけん
（さも）六条斎宮斎子ハ三品にてましけるか
秋くつ村上ノ女御にまいりて女御入内中宮立
ことみえて
前坊ノ女院斎宮のゆかりにてましける　秋好中宮（斎宮ノ御子　六条御息所）
（母ニ御子とおもひて冷泉院に御まいりありて梅壺）
（ともさしめ中宮に立給ふ　皇后ことにいはれ給ふ）
為斎宮人後入内例
一元正天皇御時井上内親王（聖武天皇太子時ノ女）養老五年為斎宮後光仁天皇納為后
光仁天皇女酒人内親王宝亀三年為斎宮後桓武天皇納之有寵

桓武天皇女朝原内親王延暦三年為斎宮後
平城天皇納之朱雀御時徽子女王（重明親王女）
天慶元為斎宮後天暦朝為女御

中ゝのちからかな
みかとゝも　一品中務のすゝめ申しく
まかなりけりすへてのきさき
二十ちかうておはしましひてしかて　斎宮
かくもおはし
もとより此御はしめ御心しらくせりて
ありけり　中宮　御の心
たまひて御かたちしめ人事
御の斎宮とゝもかく御心はへうつくし
さらにいと一此御事御のよしかな

おほくゝきまつらせ御むすめゆかし
二十よの御かすつくし斎宮申給し
けり　二条院　秋　かゝり斎宮ゆきと
かくなれは御ゆく
御のちうちかゆかしかさか御心あれ御覧
行つかせ給ふに中宮との御事ともさしても
まかせたまひしきみせられしもすなれぬらさ給ふ
さひかうつくし
候とさりせ　斎宮の此御ありさめ
さらに申さて斎宮ひとへみかつきよけ
有しそ
斎宮女　女御集に
よのつねのおはしま
かのなに

作りハたきものゝうつりかもうつくしかりつるかうこのふたこ

ミも

むらさきのうつくし

子かうこの箱にもしおもしろく蒔絵

うをかゝみもひかりさゝえし

或ハうこし　作紋清閑無紋之

秋夕　其もかうこに有菊蒔絵

同　梅蒔絵之　中箱　香壹ノ和

香壹ノ和かうかう　伊予蔓巻

もち掛ちるかの御厨子の式調度也

沈香紫無葦子細もち　身高サ二寸五分弘サ九寸七分　長サ十向

なそくうかもとも　凡人之[illegible]尚

有

同　雑々也　師説ニ　まつかうとある

いまたゝくしもかなふまじくはあるへし

香ゝ女かうにも有　冷泉家説之

ち給ふ紙之らくのかうかゝれる　御下等

一條院[illegible]　いまゝ人まかせつ

百歩和ゝ人　百歩ゆゑ　一歩[illegible]　訳完

説　百歩とゝ　百歩八十[illegible]文字かゝる

書ゝ條ゝ人撰の薫物也

合香方ニ　薫物也　百歩薬

祝用也　文為集　要方　作法　依薬香

薫衣香　補薬香　百和香　可秘ゝ

云かり

又百歩ゝ八　薫和百歩方[illegible]

件方以瓷中盛埋三七日取焼百歩ニ
外ニ香し　梅のこゝの英すを有
記　百歩の於ても待云々ゆへの
すくれたるよしあるとき　百歩伝ふ
さて申しに仕うまつりて
百歩の方の
けり　薫衣香の方のすくれ
たるはしめてもなとくわしく
朱雀院の御方をうつさせて公忠にゝ
いつくまても伝へまうし御まし給ひ
てなくて女へこと
余らのかくれなくよろしく申しも御伝
へ申給ひ

まことにしみのかくれなくて
并二世を知るて本を字方賦
すまへ世秘しもよ調合をと二世にかゝ
秘し二伝して申つゝもしたりゆへの二伝
つまとなりしをも知らて御のことゝし
こゝにのなくもの心をに
なさしめしいまに一合種の調合のやうに
四丁秘の御方を調合して事になる調合に
来の様の式部卿の薫香をこし
を代御前の秘方を伝角にいふゆへに
秘伝なしかるいふてのもとも伝ふ
ここにつゐて宰相中將公忠のことし
今さしもあるへくはゝかりて所伝なり

くさ〳〵にほ云一しおもてはかりのみえぬ肴
千とせをこめたるすはまなと一面 洲浜の
影かきしたてまつりあさく桜ふくゝつ
何となく仏葉くりかへし梅の花をさかせ
手にくりし玉かさ洲浜にかはし
女房かつらしきさく
一段云紙の花をくしておりてく
権記云 長和二年十月廿日新皇女御
百日也
実任所謂籠物二捧一枚籠蘇芳色納
柘榴付菊枝以蘇芳村濃紐結之
其一枚青色納杉子付杉枝以青村濃紐
結之并象眼薄物等張表裏色鳥折
立又有銀作葉又置之銀折敷各一枚ナシ
於是ありし御かた中宮より御くしあけの
物かすくしてさしつけてひきいて物ひとつけ
源語新子云 仏ともしとも二千くらゐ
すゝこくへつれ
小まつの花をもて 玉葉雑物云
給へるいろ〳〵の花のくえにつまたてまつる
何のこゝろもしらぬものゝ心
梅のえたに何のこゝろもしらぬ縁の童二つかさね（袈裟）
みな瑠璃の人かえたの花をそへて白銀にて梅のえた
このかはりつゝむすひ（ムスヒ）つきのこゝろにこそ
新たに五年のたりなむと
いろ〳〵の花にてかさりする武人五

葉のことく枝をしけら古今撰者の時ハ元のことくな
しけれハことことくつかひのことく[illegible]て
みなもと[illegible]をは[illegible]八雲のたくひは
本つ心の深き歌のなさけし心はつかねをして
なれりハ本[illegible]しかく手をつくせ元歌今集
まくこれしかたく[illegible]かて[illegible]つくへの
又哥ニ詠之今集ニよく之[illegible]いへく
[illegible]伝しまたなくてにもしくしいて[illegible]絶え
詞もしらしひもて[illegible]のこと申しさ流よ
縁ニ[illegible]なしていつるしま[illegible]撰なる
つ[illegible]
新古今なれとも歌もなき[illegible]
ワかして[illegible]新古今の集へ[illegible]神道[illegible]

一 幽斎か下向のとしこれを授し
忠しくハきても[illegible]詠の心[illegible]
[illegible]りくり
こなた世々[illegible]人ハ無[illegible]歌の附
[illegible]なりにしてハ二てし家
うちへ歌をもつ[illegible]帝へとゆかへ
事に[illegible]ことつね[illegible]宗祇
かの[illegible]中に歌のいけか
つ[illegible]古今を[illegible]かくとそ
[illegible]実詠のことていまた
千古[illegible]代々一宗の伝しとも申し
宗祇[illegible]法師家古伝しきせん[illegible]
この河の事也[illegible]なりと

姿ある詞のいろあはれなし
ぬしも心得へしつねに
〆世俗の詞名所の詞なとをも作りて
くるしからす只作り一つ〳〵も
秘くさ秘事の作り人すへてまひらせ給
歌の風情さもなし
ひとくかはく　先の秘傳の心得も
これつかひ歌の心得くし足ひて
わかしひのかなく　かく作りつかひ
歌の事ともなり作りつかひ足ひ
ここ作りて
みれくむしてほし　秘傳の新古なり
ここの事

よくつくるへく　秘傳の新古なとの上手
ここ作る
ゆへさしはせらへはへつくるへ　○なる
われるもしいさ
こそ　冷泉もつ作りつく　先のここ作るへ
し作りて
きくわれ作さへ　先の心のかは古作り
ひとつく作るこそ
かくれてさしくさる心ねんなし
歌作りのるに
新の歌のくきるへく　歌のこの作
わそいかくかほとし
おほかつ作すつなる事

其のくに難儀にて　さゑもんの入口にかゝり
御の流浪にて　いつくへとなく打申し
つましくさし
ことの事なし
大かうしにをくれて　いたつかれにも奥の人
から可有まかり　かゝる事か可申とも
せんこくかりしまし事　こそかゝる御の
ものか見える事も　まへて見えておもて
こ可とすりをりける百ゝの
何時（トかり）心得　かへて申し
新兵衛のいひとかへ　中にも御の心ゝし
見へてまし申　さかへ心かへりそ
あらし

さかりてつ　兵衛のくらゐかゝる事
みゝをかけて　いつとし
御前にて心かゝり　兵衛のかへり
まかりきけかへ申して　御のやうくとし申女の出まかりて
かり兵衛御申て
かりてこしきいて　まへ
兵衛のかゝへ出すの　御てより申て
めく
もとてかてかしかゝり　さかりの申し
ゆうて　兵衛の事申し
けいかきつりかゝ　兵衛のとかへ　さかりの
あくし新のかへて　かてかりし大ゆうか
御のすくまいてのゝ御心蔵てかへして

いとゞ御心さへまし　御の[illegible]し

此事おぼしめして大かた御心さまざまにです

うちく御かへし

あかにおさへさせたまへ　[illegible]問

あはれなりし　御のすこしもおもひ[illegible]

しげのすゞめ[illegible]柏梅のこゝろもしらで

いふくのあしいつまで

そこは柏[illegible]の事し　御縁[illegible]

事あらしを[illegible]

[illegible]

こしいみじく[illegible]

おもひけん　柏梅　[illegible]

まゐて

こゝにおはします　そこのほどの事中ゝ[illegible]

あの事御返して

事しけるに　御[illegible]

柏梅と
つゝしくおぼしたるにも一言もなくて御八分[illegible]

かく頼むべしと事とも[illegible]

おつるしたまひても一むかしの[illegible]

さらにの柏[illegible]

御気[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こゝろの[illegible]　[illegible]

えんかくしいつましく
切きりく所へ参　御のちゝの給へし
くく思てし　まもえたせられて　内侍の禄
ハ前の内侍し
浅のかゝさ白　今　御のくし
めすの見てまいらせ白　何し　まゐ給
こして女房かくるゝのくしも
いくよれ出あそし
松竹のかゝ白　参しよく所へ参る　中宰相
しるく
内ハまいとしいそけすく　松竹まゐらす
御幼いさけかし　思ねしらせらるくし
那まいらせる給てにいるゆかるまいらせて

三年のはる　一てう内にて十三日まかりすくしかハ
しまおしつ　紀あかつき　中宰相まいらせて　宰相まいらせ
おくさ宰相さく
おもての御のよそうしつゝ　冷泉まいらせられて御めす
三ハしつる御中しく
すみのの宰相　何　兵部卿の宮て
橘書主　東宗　友手　式部し
弁参らすく御うるもつ宰相しかへし
一人く
私　藤あるくて　御もし思て　寸
内りまいらせの六条ハ修理宰相
くらすまし参宰御し　参御し所て
うちくるゝ　ハ中さ御り

御入来の国まてゝ　御前の[illegible]せし堂く

御て参内し給ま　[illegible]詞し

[illegible]御の[illegible]しくゝる歌めて

くる[illegible]いてし　との事し

られ女くしきまし

寸　六条の[illegible]て　六条にまいりと下の

かれかいそ御しりハ　[illegible]

まれり　御のて　[illegible]

か御しやう御しこ　　何　露かり御らんて

詞語らいこと　[illegible]

詞御いつき御し　[illegible]し　[illegible]て

めしみて　[illegible]　由来下の[illegible]て

くるに御の[illegible]かり　ちこと世上　[illegible]ハ

くるしくこそ[illegible]　紙に[illegible]下の

[illegible]まかて

さ[illegible]の　女世の人てえこ[illegible]

り[illegible]しき[illegible]て　[illegible]れそし

すいつ[illegible]て[illegible]　まて[illegible]

[illegible]

中[illegible]御[illegible]　[illegible]

二条の[illegible]かれつ[illegible]

こ[illegible]こしきく

[illegible]上[illegible]　桂殿の人々[illegible]

[illegible]しき[illegible]

桂殿の[illegible]　[illegible]し

[illegible]て　薄雲

人々は若松はかへらせしてなく／＼
おんなのわらはゝかりしとさふらへて
さくらのしんそはしめてこほれまし
いそきまゐりてまうてける
杉梅の一御前御所にて二御前の本寺
いつもかくしけりと申しける
又中将になりしをはなれてもちら
杉梅の御て
内中のまへ参りける　杉梅のもくはへの
らうはいさ御て
こゝろすゝみつゝまゐらせ
浮位又してなし
私とふてとふへく　六角まへ出立し

かし別さてし
さいへき御も　　二　杉梅し
杉もの口をのれし　杉姫八條の一の
ならひて別紙てし
あつまなるせいはかなし
いさく人のうへの杉梅へ御て　叔こき
ひくのうつけたる　内証しかくかへかて
まめし
杉中納言さもあるを　　二　中納言の姫
后もあしたり　杉梅もまいてまつし
ひすかりきしうて
こゝろくり杉梅とかくして女中のへて
きしらかて讒しくまて中のうちの御

にけハ、　子　若し
もしうこと御うへ　こちらへ又[illegible]
そうちいうく　こなたの御まへし
そのこゝろやすくおもハれ　いとゝまゐら
姫へ御のあそひにて候て
やかてそれハ、えらひし事
そのかたの上の事に　御事の中ゆるゝら
おし奉る
さしてそくかへし　すこし八かれこし給ふ
姫君の今より六日に給へハ　いかにしかし
こそおもハれ　つまむすひめり　たまハらは
あさましくて
ひめくも御うらみ給ふ　きこゆる時ハ　おもひぬ

いうく年のさかへけ給ひて事とも八御八[illegible]
しまく又いまにひめ君のかた事とも申せかし
御年へり花を心をもへ給て
たよりあハせしとよくへくしも　年のひめ君の
事とも　いまいかにハいつこへまいりしかこちきこゆ
いえし
あくをうかまへ　何　さハ墓て
いつくかねし給ふ　年の事とも御のいく
そらくのかいなし
さしも
ミさいあもにしさふらふら
ひめ君の姫の事に　御てもいかく
まゐりても
私　年の御わかれ　姫君の申つくらぬ

いまゝての御なんきをめいらせんとのみ申させ給ふ
ゆくゑもしらすかなしき御のへらし
いかゝはしけれ
もとより秋姫の御かたへいらせられ　三日をへて
まかせ給ひし御のゆかりのかたきゆゑに
いつとの給ひし御ゆくゑなき
いかにすれはよからんといとゝなけれ
給ひける
又その御かたにまいりしに　弁の遠なる女房
ひとりまいりて　かゝるにはあはれなり
ある日中しさひさへいたる
御のへら秋姫の御かたの御としよりの御めのと申し
かくすゝめ申して　しも

秋姫ここにましますのかりそめにかゝるの世に
かくてきこしめしくやし
若君の御いたはしくも
弁　若をうちかさねてすゝきはきものゝ
人々に秋姫さまをおもひいらし御いたはしき
てし
秋姫ここにおはしますのことしもさ程に若君に
うけ給の御返しにそなへて御縁たまふ
若君の仰あるに御ふみの御返事
こゝに御かたのえにしのあるに女房の
もとよりかねての御返しさりて御縁とも
ふたりの御ゆかりもなく
秋姫ここにまします二人のゆかりありし

を申ける事なれと只今まてのこし御覧し
つきのよとせむつかしくおほしけるに書なと
ハこきこんしてりかへしめし松殿へすく
くしゐる中納言のせつり給ひえもなしめし
させ給ひし
くるゝ人ハこの事り中すける絵なといとけ
めでたかり

一 主上の御事　或 宋徽宗皇帝好
畫無故畫師又第とし給ふ事をもしろくて
畫をもあそはしまうけ給ひしかくてなかり
かくの事をかしき事の筋なりし御はや給ひし
にはかのことき御申し
おりくれハよしとて御あそひもしくハ絵とも

さらに絶えてなし
近衛殿の御はし　松殿　楊貴妃御かたなとも
ぬくるしくて給ひし御事
近衛殿も御覧しつる絵なともそこはかとなく
まかせ給ひしかなきくの
一 松殿
新てんの中にも絵なとくはしく
いとおしくすへからぬ松殿の絵なとも
うちつけて帝のむかしをおもひ
じうくも見ゆるなとして
松殿の絵つらくまつさへ御たし
させりまゐらせ給ひけるかなし
絵の事りうかんにまかせ御らんになる

也　秋部に入るべし
あく何かくしてもいつれも冬に可用也
神無月の名月まて無之由にて
いつまても云也
上旬は十日まてを云也　冬の上旬也
尋くへし
いまのし　[illegible]
詠る識くつれてからくべし
ゆふらる之しを
ゆふらる冬の行事し
まいの月からの冬　[illegible]十二月の冬し
一切冬　冬中の事の冬よしかるなし
年中四季の冬かの[illegible]四季

冬のさむさまされる月にてすらしも[illegible]
十月の寒風よりも冬の半四季の紅化花
落葉の[illegible]
時雨[illegible]
云てそいの事し
まくこまれてもらる冬[illegible]
こきてくし
いくいうしへく　何　[illegible]
無[illegible]
秋の[illegible]
[illegible]
[illegible]

将軍御所のゑつのつくしき
何　意見（こゝろはせ）　紀（日本）ひしくらかくゆかれこそ
心うくしくしかりけしら今をそろへ給ぬ
うとまれて
わすれかたくしてみ心中ともしゆんそうし
みそかしきこゆる以てかくゆつそ
人のしもにんさけますれ子かくれ給ひけり
筆絵の正しく絵をも年々作し
こうしの絵ものゝ作たまりし給人ところ給ひ
名家物にとて新作年をとなり絵のう
参の字不寄て身業て許年内画絵し
詞をわかつうへあかしてゐ心中とくゆへん
さゝかおもてに御しきこえ中にて以てゆるへく

あまたの絵ものゝ作つまりせんとて参り作てし
わかり作りて参学不寄有一事ある
こゝろよつかへるもの　并　二葉作し
あれし　苦し
も根元王無為みてしてかみ中の絵をもかりつく
無わかしこゝるのいうあいかゝ
何　楊ちれを一らてしゝるあかある
天性に寄しへりもを作るうこく
千　祝ひて祝しもし　今分を祝福人のしか
こしう大をし
あかろく
みうしひの御りぬゝと
何　以下わしうちかて　菅家宰府以文年

と今さし重 竹のありし 申御も
又御弟しの御[illegible]れし
ものにさしけ 今さらんくらり
新しきつし しけ御たひしたる沢 在のほる
くらしさしあり ふるゝ 給のつ 内さら
うさしかちれて まし さわる 言し
是ら ものかしけゆく 有たてさら 侍
きつて 無絵のわりけ くし[illegible]り さしく
いわし 御出し 見今し
大事もいさしけ 今さらん くさし 有一向
さしこらくし とも気 するつし[illegible]ら
まいくつとわりさく
御宝の人申ともみ分見ようらし

ここにおいて 今さらの申すさかりをこ
とまくら給 こらかさしのかわ
今さらりをさ まゐりの給 宝の侍まつらしく御し
宗
独在くさらくさし御座のすし とさらめらいか
本宗さらくれるさらし こらめらくしけゆ
ものの御のさこ伊ら給 言さうもの 言し
[illegible]ひろ見んいふ女房て つくことうちしもまるて
みかさいかとも とも宗さらりてまししくつくらん給
給御しいくすへくこし一かしゆかりし
新こ申すよのかて宝いかまれ いらも [illegible]
からくしらんは 御きのこ[illegible]のかてしらすの
[illegible]のものさこ 有つさへ 御さうしも つはらの
あしさくりをしら 事給のうちゆくらきく

おほつかなうおもひきこえさせさせられまし
さらに右大臣のみてさせしにて給ひける事とて
わしし共御らんし或は又ゆるされ御むけに
ろ申すりまし申へ富士つゆつの下り
そうかのうちに御心はすへてきこえらくらるく
御さく令をらいて給へは富てゆらきまるてや
御くこうみとし内へのあて申けれはいさけふとと
の令たゆ御へこみてすくまいて御使なとわれし
（五條）くれかくしまのおりもとゆ文字まいりて御ゆう
むこのしも中にもたつる給へのことりこてかへ
もしくあの御住はわしとゆしてまつる記えと
とさしてさてまいりかつるのお雅俗と
子こまかつてくかてい人御もしをてい深山のらんと
うきかみとものゆかうまいるの事御かきて
中宮そなつのおはしけ給ふ方まいりて
うしおまつらゆとをたすけてい下御かりつの白
とししもなくんらあし
さいわうまいりてうらはさるに候し
くらくこうきぬき中のゆり
世にるすいれかうし給ひける世へしゆくんすかく
ゆうわしうてゆさいれつる帳前のかすかり
わしうこ家右方し右衛一しほ羽衣上の事
姫君うちのか御ゆしいるまし
いまもわかつかし
うえ深かるのころまいりて給ふまてさきまいる
事し

せんみ十日ころよりはしまる也ハ
正月に叙長令以下時々多く成月もし二月よ除秋
の宰以下あまし三月に事ありかきぬあし
おもくハ御くしあなしもみちらあのつゝあり
みつしるしかやうのあ事ともあやハよし給ふ
とかへくそうきかんのえ事つ御とハこゝろの御く
御の事とも行し
こ行くしか事しるし　梅壷しこきさんと御一し
梅壷にて事て　御　新大典侍の梅壷にまいりし
まいとかへし
その世にかつてひきしきまするし
それ御合世の事しまくハこの世ありける
御事にてかなしむ御てもとて御合あるへしとて
いつれもむかしハ唐よりかはりける
い古のしきところ中のみくし
みな実ありのまゝにて
これハ古きに　又こゝにてんの人ゆかり
うるしく
私　新庄人ののりかる世の事し御の
上すこしも事し
くみあちらもれとも　内裏より御く
世もるあこのすある
給ふのうへことゝめかしく
中宮にもそれゆへ（ろ）　藤ゐし
みあくゆへへあり
うあかしく　いにしへゆかしくなりて

すくはてく〳〵し　落させ給ひ姉のまへにて
ゆきをこなしてわらはり
うゐをうれしかりて　すゞの声つく〳〵わす
まて〳〵錦夕おもひしひとしかし
世くてのうら〳〵に海もよかそてれりたりく
かくわのおもくゆき
むて給人を二言を姉のえ梅童をうかひて
内々給り給ひわらうら〳〵の御餘を
梅童女御こきん〳〵女御し中給人給て
ミて弟梅童ちくこきん〳〵うるのまひたら
御念し花内りぬてくら
え人うまあのうきとしなて出してゝの帝し
給人を二部し姉のにて梅童行く花鳥

かくて三月十日比より婚して
すこし程すきて梅童をなだちて
秋　此弟梅童すこしに姉君すゝりつゝまれ
うちをもたちて同じく梅童して　ここの身を
かくてし此ちかり口くわこそもくゝの女
たりへ給　くわう行あわてそこ中々うの
まりく中つまし此人世わらせしひさしうれ
とわりしこうとわりやゝはわりたなりり
ゆくらや梅童くうきて人てゝの給女
空世御もくゝ今更さこすあてくゝの
女給り梅童ろくゆくゝかへなのるえの
御給ひし　又まうの御わて梅童のこそ古
うりのくゝり　こきたんのへ今とうし〳〵まる

とかくて給へるの物から世にありつるの給ふの物から
まかるゆゑくわしからぬをかしつゝけられぬ
世中まことしからぬ
又其の物かたりのうちにもさらにさかりし
わたしくるのことのたくさひとしれぬくらう
云うへき古をつくりて字書かきかへのゝ
五うへし中のまのかくそゆゑゆく大和の物
らあらすハ世継かかたりも給ふ物かなたる
花鳥のかおさ並乎れし
枕草の作者ハ平中作ゆゑ内の少将命婦
源氏の作者ハ右大臣の物かたりも古人とひしらて
むかし世宗の作はうれし古宇中務中将命婦
かの古人て作者ハ今またその外にもくす

大和ハ大和守中務命婦伊勢命婦
右中ころゑて人々して又あかく二人して
らうさいうそく作事
阿弥陀職く世中務以下赤染衛門ハ小式部の
ましくうき職なと勾し右衛門かく書し
花鏡く
秋いそかくハ古職とし伊勢よりうつりの
らくも
訓の源氏のそく人ニ作の事にかく
りうき名古人して
まわりとのいてなりけりめかやかた作との翁
りきはりのこしりゆたか今はくゆうしうわか
竹取翁（古物語作者不知）　大和物語（伊勢作ト）

一　古続廿二帖（十二帖云し）右方物語をなすに其経のかけて
哥ね撰者の方より歌勝負方日（ちや）
と百首十六首歌とらう方の事となる
ゆゑより千首に及ぶなり
歌経の歌より万葉んたつらん青人若宮の
書ゆら六百番二合今ぞまぎらはし候ぞ六
出でて中比の人しき述でて
歌六百番二合可書れり　あるかへし
など撰者の大事なりけるに歌を藤野と
ふり歌ちゃしやつしけるはかりしかる
歌一首ども有こんたる三寸のうたいとゞう
多しての世でゆ三月のうたよりは
歌人にからう世にも事も世になく成の
うらみ歌あすくさもとら世にあのあさきて
歌をうら作こら中つ世事うれしくひは
まゆ世にても作のいふ中づゆめてあはれ
作りて給ふとくまうくたさつ秘へ
又ゐ一しつうまし人をもとなりさって
一いくしつ石のかりうみにしには付
うかつるの御歌をへうりしのゆのりそ
萬葉うらゆう御歌はし今歌をこし候
まゆ宣しらは古今のゆ歌の御作に
作入ともかうへ序より有かも大風の作家
まる一人体之納言の大汝ふしひつかれ
ありしのぞ和ゆ中へうらつらいくそのも
此事上萬葉いやうきぬ人ぞ此の作つゆう

いすかもくれりしらまんにきく人の心のうちく
紀とる禰のまく綿のつとしく思ひやる喜ん
無しくてかくて婚のとゆ　内まかしきこゆこ
つわくらひみをらはやうれたるみ袖もし方ゆる
まらんく　こしり　左の自わくの物はしいりろ
ろしうらけいしきく人り右嵐のはくしく
かくてとアお侍くうつつりたらしと等
元てとらアおなれつくの作右のア人く
徳をかりしく　すいし思ひのうア右の中も
らうくつくアりかくとアわぬをれ
くらわくわしくねとし内くやる心立人
いつわんさし遣すすの

六百番哥合　私加入　春中　一番

此趣　秋昭うつ葉つしせつ心ころろく
とくらの花もしアうさかわかしらす
右　寂蓮　つすはすりとはとるこをすそ
家りち思ひみにしれてさしてて
右の中アる　歌あみ位てく行らうこれ
アゆむとうのなれていてて来うまくう
陣ならうらいしか二柳の一方葉いろく
ころ思ひみてしわくかゆとらをくよある
つまらぬく
右俸とまつ白ろしの葉つりたとひかくゆく
こしわらぬさとてく
判ち左方とけらの花の事とうとけ人
二品すもア紗ゆくしせてよろはお無ゆり

こゝろなからくにしらしとひきよせ給ふことをこそつらく
とて百萬年の八まし詩も古今稀なる事なから云行
册府香春月登岳ならて忽住蓬萊九
十女媚に傳も容止吟て云り世の紀
今夜逢ふらひ詩を書中絶のもにわすら
了小紀百首集より二十あまり選しなる
古人やさし詩集を傔順の初をら
拾紙を手まねきしとつうへにはなかう
今縦ゆ作うさけの詠人云然て和縁自
師此の秋以同本へ絶作羽手九女章中
云作字書し新とわし作さ作の宮て
三紙人のくへきるも見てく二十まりくし集八
作ら書選も秋しら八策書此湯唐韻

またなきものと訓あり少年の書きものしへ名高き
書るもしく号しいつ作りたりとえふかくりふ
書の作くれしかくこれ紀かりて
册くて風折にて分も上り辞もへ
らかくいつる今網なと庭霧えたるを
まつなりてしく八見て傳へてしかして
緒しさくかくしふの作すく作すへうし
新勅　撰何百首　儲四二百師四て
となりける作りものるかり見る人にてこそけれなる
さかりにけれはさりしも
なまいけるかはけれ
もうなるめ古人なき中も紀くもをしつつなる
かりなし

無名の抄にいはく　人のまねのかこうにかなはすとし
ゆゑのくかせし無名の事し
誹諧の事すけれけり人　と　上代こ
そ誹諧うなかりけりとのみしるへから
第七うたをといふ大誹諧ともいふ物名
同かくさぬ物なへつし
其古今の翁こ古の竹取の事抄出といふか
なりし古今にもいはしきうたにむしくへかたし
私云竹取のうちにかはならす衰えと古今より
参りていへる詞にこゝろさしつかへし之哥
しき御もかもかくへ八之早下つかしさ
こししも御文参りてよろこし
ちゝかゝへ姫　ともらちかつかは竹取の翁
に誹諧也とのしるし
かりたる事ありとて　古今よりの月のみやこ
のかへりしといひけり　善くたるの網し八月十
五夜の天上へかへる事とかいはの事しとも
ともに大かたいひけりけむ事しいふかたつかへ
さ御かはしとかいふ事一し
ひさ女の給ひて竹取の女なり
ものかくしひいふかたの詞し
かくいふかたらいてしるあめ
竹取翁の事のうちてしらぬ事し
ましきのかしこひかへらいかそ
今のいくらかのはてきこしめ事にかくいひ
かくしけく　同于

いつの程にかくかくあつこゝ物給ふ火鼠のかはころも
こゝろゆかしきこしらる
無くて作りて上古の天人なりけむ其まゝ里
しくうくし哀なく行末前の世紙ありまし
無かくのかは作しかくの今よりく唐へ火鼠の
皮にそふとかく申かるまかね世のものかう
らん松もかちいよりかうしいつくし作の
りくてらんしるしける火鼠かうく大きかく
つひに申ら火鼠かちくかめの世かりけ
申のく大きなか事しけかりけこと
いふ事しかもの給ふ世作かかくの方好
もちありくかくかれ
に火鼠の松かしと申くし行ふ世紙に有

かくる作天人のかくりかかりしより孫
かる事もいらしいつ調の葉の葉の玉の枝
調火鼠のかは　かまへ蓬の葉の中にあるを
申しはへるしくらく事なくくまに変らし
いかにもくらへの無き作りのかはし諸唐の
かゝりあらかつり今作の恩しく求めける
くらかしき作の分くれ作りこゝろかなに
火鼠のかはくしかけ則申ゝら行くかゝる
も事かくしの申かしこゝかく

又　東坡詩云　氷蠶不知寒　火鼠不知暑
何　神異經云　南方有火山長三十里晝
夜火風雨不滅火中有鼠重百斤毛長二
四寸取之以為布名火浣布有垢污唯以

火焼布而良久而振之白如雪云々
李嶠布詩云縣泉氷桂鶴　読火有炎光是也
くらもちのみこのほうらいのふかき
心もしりなから
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
絵はこせのあつみ
同　巨勢相覧者（一説巨勢金岡相覧同人也云々　但高為禄書者相覧徳光代人也金岡仁明天皇時之人也承和四年九月五日蚕御所絵也）
又　巨勢相覧者金岡之子云々　金岡者寛平時人
為其子則可為貫之同時人
丹　金岡子云々
私勘　除目成文抄　讃岐少目従八位下
巨勢（姓也）朝臣相見　畫師　昌泰二年二月除日

執筆時平公

よそのつかさハ
御紗黄て　作風昔ハ純なし
見非字直（メス）本（モト）勘文
かく金紙りるのきぬもふしく
御絹人なしのあ多うるにすてあとし
かのかうて唐綺也　しのうとぬし
并まくして八弘さるし
すさうろもし京事元
新まいとひ　みてゑんに縁のうまえぬる
ゆりみるのかわし　平年く　のうまあき
すすにまくし　りのうと
ことけいさけしき浪風り加得之

大かたゝし右のあるへのゆゑは兄まくしある
御し
御うつるの妙ゆ年一うまようしもかし
こいとよくゝゝくつまあり悪風にあひて
渤國ゆゑの楯檀本うとり琴ゆ門く
わさ一所まいりて　しゆまひさうちて
世に渤海の京宮ゆるてを云ひゆ勤の寸
日ゆりうてくもゆ上京事し
并十二三条のうまゝ遣唐使すく　渤朝國く
まいりて冬ゐゆすみ蕃りのとて　ゆ紙琵琴
なを己とあとく　いふし事て
人のゆつ　呉國のうちゆふし
并　大かた人太紙秀てて
かへりもとくしゆ

きなる玉の軸

[illegible]其玉の偏し

絵はつねのり手はみちかせなれは

つねのり　飛鳥部常則天暦の比の畫工

道風　延喜朱雀時代人也

[illegible]

手は道風[illegible]

木工頭小野道風正四位下参議岑守孫太宰大弐葛絃男

左りにはそのことはりなし　[illegible]

次[illegible]正三位合[illegible]

いせ物かたり正三位[illegible]

同　伊勢物語　[illegible]　正三位古物語の名也

（正也本性にも　上下有之也）
左　伊勢物語左也　正三位右也

[illegible]

内わたりよりうちはしめ

正三位の絵のさま申也

（平内侍　いせのうみの）
平内侍　[illegible]

いせのうみのふかき心をたとらすて[illegible]

[illegible]業平か名[illegible]

[illegible]

しられ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

綱くいも給てなりしかは、来し[illegible]

正三位をつけ申給ひし給へりといふ

すくものきかわくるしはこのん[illegible]

なりとしけ

ない
たゝ中なる典侍し母なるの在の伊都内親王

又いひなしにまかりけるうへに

たかうけ
さうへゑひのかねて[illegible]業平のそこに逢ませ

ない三上て正三位[illegible]中将し業平の

[illegible]なしはかゝ[illegible]いその御[illegible]

やつし

子　正三位給りて中将也し

秋　正三位の[illegible]在原の大臣しも人

を[illegible]

ゑくとの中将ゐにし

在原の大臣の心ざし[illegible]　何よみを

童羽秋もの女し

秋かけそゝきまし何よはかけは[illegible]

あり

子かの正三位の中の人在りし

在五中将の名をえられしと

何　在原業平朝臣者四品阿房（保）親王第五男也仍在五中将也（五節中将）母伊豆内親王也

従四位下右近衛権中将兼美濃権守

元慶四年五月廿八日（辛酉）卒年五十六（見三代実録）

国史云躰貌閑麗放縦不拘略無才学善作和哥

勘物云頭季御祈五節（郎）中将

千蔭をなむ移く定めつし

秋く若蔵なむ見えてこそいとうちをまうさぬの羽

みて（蔭とし）しのちて

みるかひもなくて物をかへすなる君（まてい）こそあのゆかしさ（さえ）流

いまはかうくはるはくは来てかね主に移さわか中わ

をとこはいひおこせたりけれ

初雪のとかねのゆかしころむ尼ま雪かし

きみは来わらはかくしとみ移しさうし

なむ桃薗にまうはれて時

秋く卅人こゝろおなじ浮きて三人とも移らう

河内

なむいと物思ひめかすも仏いえかけ（りんく）ご桃薗

りし女みやらく年之しく侍るに中くけ

うらかなるといそえほゆにあ人くしうまさ

まかりける乙うつくるく妹春の

みや女なむまし

女なるまめの給くはかしひつる妹わま

一まかりけん乙とよのりつかしの宇

子給めの番移客しわしまして侍らぬさ

正三位になりて貞数の親王ししあそうし内く内

なり

秋世則親王女いこし一番ゆ訓ぬつくす

なかりなく女事なりまて一中納言なり

訓ぬ妻しわしくかうし大納言のもと

事いひしまいつる所をえ蓋ゆれし

あまたかさねしかもて人々さしまゐらせたてまつりし
とあり
内の女房のとの事し弘殿の絵合にて定と
申しつし女房
秋好中宮の八内裏にて絵合と定
女御の時の絵合し
此事は源の物語にしるして梅壺と弘殿ん
との絵合をはしめしといふて左右に
いつかたそ人の女房とくし中宮の女房の
事なとし御いくれらの人々いつれも
絵なとなかはし又ことおもしろき絵
ともにあり絵にてなのゝ絵をしたてまつりし
りとてしも侍りしこと

右は弘殿は絵合にて中納言の内裏まゐりの人
つかたもかたよりしう御したて
御世よし主上の御前にてたまはりし
おとし。
おもくはしらせたまひけり　御は御おもとく
おほくは御かたよりて御世のよはまけ
みな主上の御事としたまひて源氏の事も三條の
ちかく御扱にて
秋好中宮は弘殿は中宮のおほく侍ける
中にても御世の絵合方人まさりし

一　古来物合勝負常例也
朱雀院菊合（永承六年）　永康六年内裏合
郁芳門院前栽合　寛平皇后宮扇合

上東門院菊合　正子内親王絵合　等し

後拾遺集（正子内親王絵合し侍りけるに　かねのさうしに書侍りける）見わたせは波の
しからみかけてけり卯の花さける玉川の里
中ましにかねをえりたりしか
神谷絵合に人々まゐりて絵をもてまいらせしに又ハ梅壺
なりけれはこれを見しらかしくとく
かの絵の事し
又す由ありしかに二まれ
みな遊ひのかみ絵ありし給ひしのならし
其の後ハをとりしに　絵合し　給ひてかゝひ
つゝ
この絵かとゝのへるに　寛て御手本らし今の
世よりつたはりし紙絵ともなりし

今ありしかはかくも書まさて　絵の詞かきそへ侍し
くはしき人ありしかとも　まつし
くりしまかせつくりてまいらせ侍ハ　かはゆく
中納言今かゝるまゝにしてくまとりてや
詞をまいらせて
何のことゝ侍く　深窓秘抄にあり
かくみえさ
たまさかに書きたる絵ハ
其事ハみな絵のかほしたれにても
らふるのせつゑも
年中節会の絵
称朱ゝのまへにある御絵のさゝめと
いふ

ゑんきの御てつから

此桐帝は擬延喜帝事也已分明不及

是注

并桐壺の御しるしとそ[illegible]

我御代のも

又この代の事をもかゝせ給へる巻に

なとの年の斎宮の下りありし事は桐帝

の御ときとありつる御絵をとらせ給ふ

の御世にありけるにやし

桐壺の御世の事なれハ[illegible]此のこし

なと斎宮の御下向の時大極殿へ行幸か

くわしき[illegible]

さし[illegible]の事し桐壺の女御の[illegible]

[illegible]公茂

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]絵の中[illegible]

[illegible]

きんもちか

同公茂（絵師高名 禄五）采女正巨勢金岡孫公

忠子也

ゑんの[illegible]

何世業[illegible]桐[illegible]

[illegible]

[illegible]

こゝ露のいのちをたのみ給ふ云 かの御心をこそすゝめし
こゝろよこし心なく定めなし
何事も仏菩薩もまもらせ給ふ御諚し給ひ
とかくの心もなくてありつゝもつくしなれは
つらきにもすこしの心もかはらすして此の君をうらみこそ
うらみてはありけるこそはかねての心にも
常に申し
私には御身を身もちにはかはらぬ
法の御こゝろ給ひしもたゝ中に
思ひける内裏の藤殿の御心を見て法たる
藤了人申させ給ふは法の藤殿申す
させ給ひても内裏へ藤了人もおしく思召しは
内裏にかくして法を藤了人申されけるとて

藤了人もおしく思召し藤了人御心の御いかりし
わりなくもとむる事の叶はくしかるへき
給ひけるに御心も法によりて御身の御行に
忠なるへし　其所にて御心を給へ
まかせ給ふ御心の御心の御心もかはり
まかりけるにして
其集の御心　其集の御心をこそ御身の
此心の法御位にかはりてもこのうへに
申す　其の御法は御心の御心を申しもと訓
此御心もかく申しこの御心も御心
そこにありては御屋をもとむる由御内
又此は御所の御心をかへし
御身の御うちにて有

すゑ行ハさかへて　たすかへて　いのちをも

松杉の見すしく行く　ふるし見しふかりうら

ちうたまとし

以しうちつかへて　うちつしるい　さうしつ松く

升皆かう結かわかりかし　幻の細令知傳

一しるうさてつつ　沖あすまうう行しい付

其のかしこかし　字結見ひいてとひつゝの

ゑんそしかとしいつて　鼓あり一高を湯其礼

うんそしを　まもし松しく　古ちりさ以きく

為稲謝太上天皇と云四物結綺し　宇結

見ひをを何り　春もして上令ひくまし申す

あもし

何取令細合香折其八半枝像右四為稲

謝太上天皇謹献是物尋四始也　長歌

杉湯若丸うゆしさうて　高うつくとも

うらわの何のすゆ見しいてうろし

ちわうらハ当りわれわんてとくに詠代うまもうさ見き

を内うるを何おもし　うかすわうのハ

新あわ申内しく　何の事ましきんし

伝のそのうて衣めの行しわもハりくくくもち

うらしくうへてまうり

手かゝ代ちゝくに宮の事し

すちあの何ハ棒嚢うち細ゝ　其ちうら

うとつるの　ふれうら結すそしもて

かしわもハさもム中り見てしすみちへ

さ何りようらき内つるしくさし

何　縹唐紙

くさきうつりのつくし
はのみてしゆ人すゝなり
年のれねくりのさらはゆん人するかゑり
はのみてしるの事茶手候ともう。みしわたつきく
きましかうらりた上て至わ客おり
かくまつお院のみくのさて帝ニ写お
みつくらしかつてみつれりつねへみてく
もハ見くれわく
わりし世らうき御侍く
すゝみしわおさうくまつる事お年のさは候ゝ
みうのまく御一百人公林松ゆりし水一百
さうさく御まつるくて三とうてわりわ行つき
都りうけりの事れして志かのすみ一句あすつきく

。みかすつき
行りす候き
ろ中す等号
手わりおみく
ハ寸ほく
アーし

事かりぬかつわりうてさらし行つわかゆ寸
さゆく
おしく認もつりしを　年の御消息公事なり
つりしと見寸一しきと　手紙也し
ふかしかふらしくしなや
お　織のゝ事ぜいつら　手　萬紙認し
ひゝてふうさうかさし事し　時
はの名冷て后ふうくらつてさりうつすりの女院
ふうさりまも
何ことにか女御し廿二条右大臣の四君
かゝ右后らつてく気もり知るを
に朱ろ冷泉后のゝ中らゝ佐々宮西后
ふ様のすり佐りす堤中ろまり女御也

も侍らさりし
すくしつゝのほりてきこゆるの御ゆるしさへ
方縫の事く給のまり
そのひしさくくりまかり
に三月廿日けしきく桂童にこれ下人まる
内給人かう
ひとたの御給ひ　方あ桂童大刀御
かしに命婦小右衛門
女ひとのさうしもしかかしくそへりけり
かたへこさくやまとり
方女房のさうしも台盤所にまいりて御前に
むかしの女房のさうしもし人台盤所にとくらし
世給へかう内侍のかみくハ下使かの三月晦日

内裏に今給様しつまゐらせらるへく侍なり
うたの御庇まして本冊事
臺盤下立御倚子南北四間為左方女方座北
二間為右方坐渡殿南北敷緑端畳為上
御座清涼殿簀子朝臣座之見西宮記
詞（三月卅日）天徳四年内裏哥合
西宮記云其儀西廂皆懸新簾（納仁寿殿也）北
五間（渡殿）立御倚子（臺盤所倚子）南方立御几
帳立置物御机南北四間垂御簾為女
房坐其北二間右方坐為御座渡殿南小
哥数緑端三枚為上之座後清涼殿東簀
子敷（有脱字も）侍渡殿南北桐分鋪長畳為侍
臣座南北庭各敷畳三枚為承所召人座

今案清涼殿西南也

御記云暫擬請涼殿南殿中渡殿鋪

てん上人はこうらうてんのすのこ

前ゆかてゝら

并清涼殿は此殿の西也

あまてらすかみたちのけしきとくきりの

かりてゐしよりさゝれ化のうるのはしきよらもをんへ

えひそらゝるゝのきれく

あるかきく　或天使云今按方訓讀業檀

机蘰芳下机葉綺地數之

今案左右今ゝて業檀の前にある今按蘰芳

あまたゝ化しゝてもとゐるすゝ下机一まい

まゝ色めて宮のしらの綺しゝたゝ數まて

桃枝すゑてうらうちしくてゝかれハ蒲萄染

てうの綺にて天使すハりて宮使すゝむ其

北にすこしきゝきうの綺にて化粧してあり

うしろにハむかひて人あつきいろうりさゝへてうをのうへ

あつくめくらしをかとりゝかゝにてゝうちの御簾

何　天使童女四人　舁　安臺之

并まうゝれてはゝめて給ゝりてこれをもてゝしてつく

用之也

みな所々のまつりハ童女のまへにさきうちよりのこし

る干なかるのかまへにそのしあるいろの上

えたりさゝかくれるところとくれにまあのくら

くれハ皆紀しあつくめつて二もえしくもゝう

りのて並りくれハ妻ゝしおほ然くして りくらハ

いかし　朋む
ちうちんのくたやうふうて机らんしき〻て
いわゆゐ二寸のえしきわしやひろつしかうそくの
ふくよりいうへし
同わしやしのうゑても名きし内り
りわらひいとしいおやひつ机の寸の足伝
つしうり尤ういくうちとすうくうちゝ之く
うくく下濃（スソコ）く童ほ装そくしくうい爪文
ちうてまさ名く菊のさうてくほこて上あつ
むし天徳右方何讀方侍机藤芳ほ机
書侍也装くえし
今案右方侍るゝ歌合人わくてよりへく藤芳
あうくれとこるおもうくありすつゝかほ机つきき

えゆしさ地うてしきさきのわひろの錦く
かしきつ八机ゆつてうちしきくとわき
蒲萄染のしゆのさうく天徳の文倒え云
そらん寸りすうくつうしやひくきの絵を
ちしきくてり

同　柳合風流之事

天徳両（御）記云　右方念侍四讀二机（一奇 一等）
案上自御・厨西辺歟　童女一人（色）着青実正
執銀花柳枝居砌　次小舎人舁員指洲讀
置実正前（如御記 者北）　記次自左方厨上侍方案上童
女一人執地敷々前　梓如右　次童女四人舁洲
讀立地敷上　小舎人二人代砌下取傳置　員指前
云し

承暦之属已下依為八條例略之同流設之様也
よろしハまいらせまいらせ候へしこそね
みおこのさうらふ
ども まいらせ候のうへきた柳のうへにて御椅子ね
の御きさまし
何と なの赤衣たのまいらせて 蔵の装束
さくしなりとして
と童地おれてしもの給たらて二の御帰
こしえてさうらふ 唐衣たらて子無二まり
うこしかにて
十まいらせてかりの申さとりさきにおくさし
せうしおて一おりまいらせてきまいにおすへきハ
こうとりし是めしてうけ とかまいらせ

まいらせそうらふ御前参りて卯なとを
御膳下さしれのかきあけてうからうく承れ
まいらせ候ども御膳しかいりてまいらすへく
まいらせ候しも御膳まいらせ候　八上都
かしこまりて候
給のへてまいらせまいらせて
くらのうえまいらせ候てしん
何お居て ども人の女房として典侍掌侍
華前にてたまたまさへもまいらせ
まいらすのきぬのさきのさまして
かまいらせ人たし
ねまいらせて給のそれまいらせ童の
装束して乞八給人大人形の女房出て

たえをつらくさうらうらんさまかへし
うらのたいし権中納言
御氏後見したまふにくらへ弁内侍
うのはころのこゑも　弁　業し　判と
いとしかうくれハするなかり
さくらの業あまたの給ふ御中もくらし好給ふ所
御のたしゝも行つゝ絵合しては中宮の女御
かれハかくさや人給ひつゝ申してん上手給ふ
と御筋くらへ古今の昔の絵人のてに絵合給
かくら

このえんさつしまうらて候ま
給ひかく業のつきさま御覧ハ判をし給へく
まい給ふ四季の絵もいにしへの上手ともの雲

ゐき筆もおよひはしいつて業ものこゑたくみあり
うこかしさまいかにうらみなかりしとそえん
式人合業まては左方の絵かつゝくてう梅壺ハ
次くらの御絵しもまていかなりて中にこゝの
くらの御絵も文まさら吉ことをきていそものいま
左絵権中納言くらのまつてすゝゑて入れまく
紙絵の合すかしりてもんまか一へし
紙絵権中かのこん叩してすゝてらこきなた一へ
まいそれかしまいの詞ありけ
歌　世あうてうくしいまし人ゆきまする
あれハ梅壺うらの絵のさまとゝる
つゝはてたつ有まい宮のかきつゝれ
何絵合いうらのしけりしてすまいのみ

竹取かくやひめの[illegible]つ此絵相覧
右 宇津保の俊蔭を合せて[illegible] 詞ハ貫之
左ハ絵の事をかきたり
私 卅巻一部也
むかしのつくりものかたりハ絵の中にせし
かくせしけれ[illegible]山の[illegible]
くれはさわくして上の御中納言
その心をよくすゝめてせさせて[illegible]
つくり絵[illegible]くして[illegible]事をあまの紙
絵しきここまての御絵を[illegible]
於是第九詞云庵[illegible]絵を[illegible]
ひ[illegible]
いまの[illegible]

何不恥古　　右 一首之
むかしの絵は山の中にあるを[illegible]
つくりたる上の[illegible]
あるく今の[illegible]
あ[illegible]
あそ[illegible]中[illegible]
むかし絹飾の[illegible]御[illegible]
[illegible]
詞作紙[illegible]
あて
私 清冷殿の[illegible]
[illegible]
[illegible]絵の[illegible]

しゆもまいりてとく
いとしのさわくりさしいてく
廿　御めの初しんのつきしまいらせて　いてく
れハすけのおはしりきてそもよひて　いてく
まいらせ
廿一日　方一番へまいらせらる　今一はんかう
御ひきかへまいる
あい　云今日獻まいらするとて　天正云今日
今結めのしまいる御所にて御むかへ
さしあたりまいらせられて
あのまへみくみのおはしまいらせて
新大すけ（四月廿六日云々）　二条内新大すけ　御人まいる（古葉にて平有殿）
内侍まいる

まいらせつゝれのすゝめてしてでの　[illegible]
つゝくる御ひとり　まいらせてまいる　[illegible]
まいるの御つりさしつかひつまくし　[illegible]
御ゆめまいらするのつまあつまく　[illegible]
おしきつまいりて　云ひての八房へいる
つゝひすつくし　（八上下）あなく
つかさしまいるあなきさしまいる
中納言のなひらくにまいる
ひとりの参り　まいらせて　御今の上なくまいるら
かつまいりて　大すこりてゐまいる中にすくれまいる
ときのみつくしくる
まいるいつき　めの上な
御今の上なまく　かりともゐ　ひとりのしかく

くはしく御事ももの〳〵しく御つかへハうちの人
申すなる一し　御前にて　御手水番へ
さこふらふとしか〳〵しく物しく
御ゆひ御れはつるし河物くてみるひとを
本みつおもてわたらせ候　只今の給への御料
すまし物る御りそしくて　物きて　こしまく事
ましもて詞　本りてくてさふらふし
ゆゑのまへくわの前のほとてうしゝ申
いふも詞葉なり　しわしまいらせ　本給へ
みこし御物給ふるのせりこし　給ふるも
かはの人りしき上記さしわたしと
何一日きもしき日給ひわたりわらく

私　新人日次記當人去らく　是ハ條右御
つらん詞物すなり　給の方わ一し　終まして
しきと日記あらハおかしあらし
参りたらふまても御しもさふり
さらりとれ詞日つるやれこるとわか
又　三位局人在給員九らく
表わ申かくらへわ物くみりくいてわらへかり
御めして画りさなしたまへし
きつりしつかし
同　當下夏　三位御厨子所供御菓子干物
次供御酒　在大臣記座献盃（見西宮記）
いともわかるゝ御しくらう　さしくらう御の我
とこりかはりてゝ御申して

ヲ 於物くらの一説のうちにも判れ給ひの
自像の例もあし
すこしもさるにつけめつゝくもしてん
又自像の御し　ヲ美も帝めつく女帝の
竹修しつゝあらし
修のうへ中にもすかり
ヲ 桐帝の事　もとくら桐帝の修くてかね給ふ
かくゆかしくゆかれて
さいつくにかきの世にもさいすかいかにもしあきと
わくしきにすみいつさいとふしくあらしわかくへ
いつよりかやらん
ヲ 顔回の不幸のかなし
何論語云 有顔回者好学不遷怒不弐過不
幸短命死矣今也則亡未聞好学者
史記云（仲尼弟子傳）顔回一箪食一瓢飲 不幸短命死
白氏文集云 人数奇 詩人薄命
これらくいかんさしかてくるいる中きれ
すくわすへこのくいつわらしくと
いさめくてつかつ
たゞ不幸なる人のみ苦しといさくへくのあおくらわ
かくすへさのつくつくしへ命く幸く人
かへ為寿くにゆすれ御もく信事のあ
修くのかのかは尚くまいしりさつゝ郭あり
つくれく事されみすてんなう事もあらしく
修り杉くかへこのかしくとしかゆす大わり

さて有し御のいのちをかへすまじきよし給へ御つたへまし
ましく
かくてしのゝめのいとくの御あはれなしく
河内少弐少弐とかいふもの出御手紙承りて
少内記にて
年廿あまり御年まさりてくく菅一の行し
仏の御しくさかりつらねて
給ふ宰相この葉をつまみつゝ給ひて
見えさせ給はずありしかは　御謫居の御すまし
松何の山ありかりしに
こもりゐてひとりの人にありしかは　さるほと
給ひて御仏をみるよにさせ給へ
菓のありつまゝに仏を見給ふに人の給ふし

かくて下りて都をいでゝくたりまし
されはつかはしまゐらせ御覧ぜさせてきかせ給ふ
上御らんじつゝつかはしてけれはいまは子
こゝにもふかく思仰ありける御のよし
さらに御らんし
すみはしきよきのきゝゆく　いまの席はこう
いつも宰相宰相とさきほど人のこゝろ給
（かくして月輪の御こと）
すみのさらに仏もなくつかはせ給へなきさ
なくなりて
もとの御めの有さまの御こと
なくなり世のしきまゝに申かくてまつの深
さ御さまにとくかはりつゝありてまた

ーー有ゆへし
然のこと経師遠かねかすくハなみ
如し自骨の哥罪あり露しさなきもとめ
師有ゆへ哥に哥ちにてかなとゆ事ハ
うかしかれかきを有にかくて悲してみ
事なかうらとゆへく
業しらるゝことし　二うる事ともあやかちし出しかよ
伝しらる
何　哥仙霊ち因誉出智恵
むね　哥もの東作も　二不能しと云哥すのし
かうさらうすしいかいかりかもさらうつからく
何かかるの人悪かとく
私　哥言しゝて能言をも下以たちし悪く

ゆへに其作の哥聞ゆへく哥ありき事あそし
哥有行智洞有行勝くと云事あり
しるらけくふ心　ものは哥有事し
哥うらの中ゝり人
手　きゝしく哥の人へしきく業ね人ならぬ
まるゝ
むうし云事ちとも　将の哥あらぬ
翔八哥て哥の翔人ゝうちの事かいけしき
うゝまへと云し無知にそのと哥の人のちかく
一し
私　人のはちくへ作すみなるへしうか
うかの物しむる哥て無からくしねし
い物ちゝ

たゞの御前にてこそらん内親王

御子柳くこそ宮女のこゝろにこそらんいれてもあはせ

ことくまゝし　まいらせてまいて　こそらいはおほせ給け

この中にもこゝろくこそいらへ御之け

こゝろをとしとて

御子の御の事御御てゆめてはやの御事

こゝろもやうし御かはしこゝろ合御てわれ

ゆらいさ入事あらはいとうしつかめ

しひかり申事申させ給候ことく

ゆゑのいたさはすていさゝか

もとらの御のゆかくの琵琶御のまきこと

なもちら上の琵琶御をわくゆいゆき

申うへとも琵琶御のうらへ事すらん

いろ有ことの事し御の御諺琵琶寵愛の御

事とて語りの一世の御氏小辺大臣御子の御

ありけいでまし云

子御女弟子小辺源の御氏御わたくしたゞ

河原氏子の系本益工以弟琵琶譜琵琶已事

御大臣　源の才一御氏等小辺

大臣御子大臣御諺并悪善等緑大工益

丹書云妙太上天皇御自幼習以琵琶鼓琴

譯琵琶之技思之所謂究其微音云

琴しけのそ行一事なん一かくし

御の琵琶の給ふ云ゆし

こともたしてゝ由の給

琵琶の一二の好み給ふこく行し柳事とゝやらん

むつのせちゑもそれつきにおのおのまへ給ゑと
禅師をそへたてまつりて
いかゞきこえけんきこえて
子 まいらせたまふへうけたまはりて詔し 一説
私 修の修しかへとまいらせて以下に成ます御経
ひとへにあらはし
すこしもの上にもわたらせおはしまし
宮 みさせたまひけるかまへて仰さまたげたまひ替へてと
うちもかみゐかさねまし
修り種をときまうけさせまして立給
修の方のゆ息もさしたる中のくて
ましたりけるて修の事なけいでもまた
さうゐ

この御前の修行のまへの事ども出でむためおはなれ
修し
せちゑふきふる月さしいてゝ
子 修しの後今こそ十日比に
よふかうまいてさせおはしまし
む 内舎の西義かへらせたまふ十日に九月き
よからくさせゐしをし 内か
みさきあつまりあそばしつさくものかたり
月のさしあかりてもそこの修かゑのこゑ
おりゐてゐける
かんのつきみの 子 書同し 女房し
私 修修新衛し 又 相模ゐつきとよ
この承若の事ども八條の丸寺 一説

右李部王記承平四年四月新書合勅曰
中宮之様絵所之御奈良之百首新成
宮即為行女（少将君）書〻御本云
今案此合ハ此人[illegible]御絵之事[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
物合[illegible]事
右堤中納言上人等（今案人[illegible]）[illegible]
右人相[illegible]見御記
家[illegible]共[illegible]人[illegible]根合御日上合
[illegible]御絵見御記　[illegible]書司

かく人物中御元に[illegible]
まつらひ
[illegible]御心[illegible]
菅原[illegible]筆を白[illegible]
[illegible]詞[illegible]絵中
[illegible]御前[illegible]人[illegible]
[illegible]
[illegible]天筆[illegible]深[illegible]
[illegible]深[illegible]中の上
[illegible]白
[illegible]物　世人深[illegible]
絵ハ[illegible]
人々の[illegible]

ゐ御禊の日ハ御所のまへにて一人物見におはしまし
物音すゝみて御前にいつる天皇よりも人給
ふ御随身雅行取て物見御覧し人等けしき
あやしう御所のうちの人々の気色
御前のさしあいはせたまひて人々あやし
うしとて中宮のかたちすかた
御天皇大臣紫袈裟一領大納言白合
御衣一重冬織白単重御衣白金色絹
上東門院ゟ人々に御ゆるしの衣
御[illegible]物まいらせ給ふ
子ものゝ禄給ひてのちに御身にてあ
む御ゆき給ふの御けしきいとめでたう御
禄給ふもいとめでたくて

かのうしろつめおはして
何ことかあらん中宮よりさるへきおほ
せことありて御つかひのまいりて御返し
あはしかはし中宮よりまいらせたまへ
給はんとて
む一品の中宮とあはせて[illegible]
[illegible]（御ゆるし）
西京の宮とかやのおほしめしけるを
中宮の給人もおなしう御ゆかしけれはや
さまかはりて泪おとし
みかとの御中の御めのとなりける人
とくいふ八日の御中にさしくたされぬ
かくして御中の[illegible]さらに給はる

あはれ十二月くましくをはりのわかれにやよろこひ給へる
なりそれをかけ思ひゆふへの詞もちの姫君
み[illegible]のふかさの中のしさまてさき
もの姫大夫の[illegible]すゝ白いし[illegible]の事し
もなく手[illegible]にて[illegible]御中のことに思ひ等
御らんし
斗[illegible]もうちのそゝ[illegible]つゝや
宣旨くみなみ中宮し[illegible]して等
詠さとはいとしきて[illegible]中宮に
わかのいてまて[illegible]にあはれ
[illegible]あはれ[illegible]わかめ[illegible]のいて
うへもあは[illegible]ましかは
[illegible]も今給[illegible]一紙[illegible]ふし給

かくて御所の兄もおはしまさせ給ふて
[illegible]宰相つ[illegible]して[illegible]おはしますて
[illegible]つて
[illegible]まてこきてんの女御権亮[illegible]
[illegible]つゝ事御権中納言の君て権亮御所の
[illegible]行[illegible]
くさ[illegible]さ[illegible]くらつ　斗こ[illegible]ての事
新帝[illegible]まいりて[illegible]宰相
同[illegible]かくて[illegible]かへき
[illegible]御[illegible]権中納言の君て
さいつ[illegible]えて[illegible]のつと
斗宰相事御[illegible]大輔[illegible]御し
[illegible]

私もとより源氏大府よりの下補任のこと
しかるへし
又世のすゑにも生れての聖代も
としかへりしくとも八百年の御門る
すこと人たまふ給人たまつりしめる下座の
万人も出て代々の事
河　天下明徳皆自堯舜始（史記五帝本紀）
例始自聖代云々

おしくて　源氏内府
私　元より源の御位なとにて今時して許給
ミま事おかいこくしの御思ひ事ものもおろしいし
とまりしてかしかたし　宮上今の事
ゆし御かはりにゝも

源のむしかへ人のまうすまゝなり例しかるへく
下のたかしまへくかりしたまつる事也
いふ事い
よの人とかめつるまゝかきなさるとて
同　大友王子（天智天皇十年正月任太政大臣天武天皇元年五月坐事被誅廿六）
東三条左大臣（承和七年八月七日任右大臣年廿九斉衡元年六月十三日薨四十五）
（于時左大臣左大将）是等之例也
六条院三十二歳也
私　源氏年三十歳之
しかりけるかは人のむすしくこそいとかなし
河　今覚羽往独抜而出成仏正覚
史記云　大名之下久不居
後漢書　位尊身危財多命殆

文選云木秀於林風必摧之行高於人衆必
非之
杜詩曰自謂頗挺出立登要路津致君堯舜上
再使風俗淳此意竟蕭條行歌非隠倫
むかしハよに作しかへし
御の内大臣にてまつりて半はかりて
（程）治せつゝ侍にまかりこしかたへと
ちしりかし
中アる言り御事あるへしとかし
に会し事との事ありていしかたしけり
百年一とをし
今よりのちのきこえてこそ会のうしろめたく
とらかりかとて甲斐さて会はしめなくて

すら御の按察のうへ
よろひなともさへく　。
上皇八歳にて御出家ありしめ[illegible]御堂つくらせ給ひ
たて法りゐて御堂をくらゐある事ゆゑ
ままに大井にて皇のゆるせ給くしむかと
つくきくらよいつるも
に遊縁のゆゑかはし　ゆゑあれはさるか
くらうし
まの思ひけるとてさ御ありしつきにとなく
にタ思ひとか申しあかしにしてよ申れし
しけり
我いつかは時侍ことにて御のつく思
としさに御つ入あかしとて身あし

いつまても[illegible]まいらせ候[illegible]

さつき[illegible]

御めてたく申参らせ候推て八[illegible]

とりより[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan